

# 英語における 目的語節構造と不定詞付き対格構造

山川喜久男

## I

現代英語において、述語動詞の目的語が、さらにあとに原形不定詞(Bare infinitive)もしくは to 不定詞 (*to*-infinitive) を従え、前者が後者に対し意味上の主語としての関係を示している簡潔な構造が、かなり慣用性を発揮して用いられている。いま、この構造をその構成要素の形態とその歴史的 성격に着目して、不定詞付き対格(Accusative with infinitive, 略 acc. w. inf.) と呼ぶこととする。<sup>(1)</sup> この不定詞付き対格構造を、意味上それに対応する目的語節 (Object clause) 構造と比較してみると、これを従える主要動詞の種類の数から、つぎの 3 範疇を考察することができる。

A. I saw [*heard*] him *come*./Suddenly he *felt* his panic *leave* him./They *made* [*let, had*] Bob *teach* Mary.

B. The king *ordered* them *to banish* him. (Cf. The king *ordered that* he should be banished.)/Everybody *expected* her *to marry* him. (Cf. Everybody *expected that* she would marry him.)/I *urged* him *to take* good care of himself. (Cf. I *urged that* he should take good care of himself.)/He *intended* his daughter *to play* the piano. (Cf. He *intended that* his daughter should play the piano.)/I *told* her *to see* a doctor. (Cf. I *told her that* she should see a doctor.)

C. I *believed* [*thought, considered, knew*] the stranger *to be* a policeman. (Cf. I *believed* [*thought, considered, knew*] *that* the stranger was a policeman.)/He *felt* himself *to be* perfectly sober. (Cf. He *felt that* he was perfectly sober.)/I *saw* my hands *to be* red with blood. (Cf. I *saw that* my hands were red with blood.)/He *declared* [*professed*] himself *to be* of the same opinion. (Cf. He *declared* [*professed*] *that* he was of the same opinion.)

A にあげた文における主要動詞は see, hear, feel, watch, notice などの感覚動詞 (Verbs of perception) や make, let, have などの使役動詞 (Verbs of causation) であり、目的格の名詞や代名詞のあとに to のない原形不定詞を伴っていることを特徴とする。この原形不定詞を目的格のあとに従える構造は伝統的な不定詞付き対格構造の具象的で直截的な特質を形態上で具現しているというべきであり、歴史的には、ゲルマン語から古期英語に、さらに中期英語を経由して近代英語に根強く継承されている統語法として特に注目される。そして、これらの動詞は、感覚動詞ないし使役動詞としての意味を表わす限りにおいて、目的語にひとまとめの抽象的な陳述内容を意味する *that*-clause を伴うことは、少なくとも近代英語では許容されない。

B におけるものは命令・依頼・勧告・通達・許可・欲求・意向など、主体が客体に対し、ある行動や状態に至ることに関し意欲を働かしている意味を含んでおり、意欲動詞 (Verbs of volition) と称してよいものであるが、あとの目的叙述語としては通例 to 不定詞を伴う。この種の動詞の中には、A の使役動詞と近似していて、意味的にはそれとの識別が微妙なものもある。たとえば、*cause* は意味上では使役動詞というべきであるが、中期英語期におけるフランス語からの借入という発生条件とそれに伴う構造上ないし文体上の特質の点からは、むしろ意欲動詞の範疇に属するとみなされる語である。

この種の動詞とそれに従う不定詞付き対格構造は、中期英語以降ラテン語ないしフランス語の影響を受け、量的に拡大してきているけれども、よく英語の特徴的な統語法に順応しているものであり、これに対応する目的語節を含む構文は、それなりに自由な表現力を発揮しうる余地をもってはいるが、どちらかと言えば形式ばった表現法と感ぜられる。特に、*I told her to see a doctor.* に対する *I told her that she should see a doctor.* のように、対象とする人を、主要動詞の直後の目的格 *her* によってと、*that*-clause 内の主語 *she* によってと、重複して表現するということになり、簡明な論理性を好む現代的言語感覚にそぐわないものとなる。<sup>(2)</sup> また、今日 *cause*, *want*, *like*, *get* などが *that*-clause を従えることが慣用的でないという事実も注意されるべきである。

つぎに、C に属する動詞は知覚・思惟・判断などの心的活動またはその表現行為を意味するもので、概念動詞 (Verbs of conception) と称してよい。歴史的には、英語の不定詞付き対格構造は、ラテン語の影響を被り、それに促進されて、特に 14 世紀以後次第にその範囲を広め、16 世紀に至ってほぼ今日におけると同様な発展の様相を呈したのであるが、その拡張の要素は主として概念動詞の構造であった。<sup>(3)</sup> しかし、英

語ないしゲルマン語本来の不定詞付き対格構造という観点からは、それはむしろ外的ないし付加的要素というべきであり、現代英語の文体では比較的に文語的価値を帯びるものである。それに対し、概念動詞が目的語として *that*-clause を従える構造は、しばしば冗長の感を伴うことがあるにせよ、平明な口語調の表現法である。上の例文にも示したように、A の部類に属する *see* や *feel* がこの種の問題動詞としても用いられ、より口語的な *that*-clause を含む構造に対応する意味の不定詞（主として *to be*）付き対格構造を従えることがある。その表現法はそれなりに引き締まった文体価値をもつものではあるが、同じ *see* や *feel* が感覚動詞として原形不定詞付き対格を従える表現法に比べれば、明らかに文語調のものである。

英語における不定詞付き対格構造は、特に A や B に属する種類の動詞を主要動詞とする構造では、古期英語以来かなりの程度に確立されて<sup>(4)</sup>いた。しかしその反面、その具象的集約性に比べれば、従位接続詞 *that* の導く目的語節を含む構造は素朴で端的な表現法であり、初期の段階における英語の統語的特徴に適合した一面をもっていたことも否めない事実である。そのような言語意識が、C の場合には、その構造の意味的論理性にもよることであるが、今日まで持続し、表現の慣用上に反映されているわけである。

もっとも、本来の感覚動詞が概念動詞に推移して用いられる場合、たとえその意味上の推移が論理的に確認されえないときでも、その心理が言語表現の上に具現されるということは自然な現象である。われわれはここに英語統語法の本質的特徴の一斑を垣間見ることができる。つぎにその例を素朴な具象性を文体的特色とする 1611 年刊行の英訳聖書 Authorized Version から引くことにしよう。<sup>(5)</sup>

旧約聖書の冒頭 *Genesis* i の中で、

(1) *God saw that it was good.* (神これを善しと観たまえり)

という、*saw* が間接的な知覚作用の対象としての判断内容を意味する *that*-clause を従える表現を 5 回 (vv. 10, 12, 18, 21, 25) 用いているのに対し、

(2) *God saw the light, that it was good:* (神光を善しと観たまえり)

という、*saw* の目的語として、視覚作用の直接的で具体的な対象を意味する名詞と、さらにそれについての判断内容を意味する *that*-clause とで重複した構造を従えている表現法を 1 回 (v. 4) 用いている。われわれは、まずこの (2) に、(1) にくらべ、具体的対象を端的に強調する簡潔な文体価値を認めたい。さらに、v. 31 には、

(3) God *saw every thing* that hee had made; and behold, it was very good.

(神その造りたるすべての物を視たまいけるに基だ善かりき)

という, *saw* が直接的な具体的対象をさす名詞語群を目的語としている表現も見られる。統語表現の上から, (2) はいわば (3) と (1) との中間に位する過渡的現象であり, *see* の本来の直接的感覚作用の意味から間接的知覚作用の意味への推移を反映している。それは, さかのぼれば, ラテン語訳ブルガタ聖書 (Vulgate)<sup>(6)</sup> の

(1 a) *vidit Deus quod esset bonum.* に対する

(2 a) *vidit Deus lucem quod esset bona:*

の構文法の差をそのまま写し伝えているものであるが, 今世紀の Revised Standard Version では, それぞれ

(1 b) God *saw that* it was good.

(2 b) God *saw that* the light was good;

となっている。つまり, この現代英語訳では, (2 b) も (1 b) と同様の, 重複のない合理的構文となっていて, A. V. における簡勁な律動性が姿を没している。ちなみに, Luther 訳を基にした現代ドイツ語訳<sup>(7)</sup>と現代フランス語訳<sup>(8)</sup>とを付記しておく。いずれも, *Gen. i. 4* (2c, d) の場合, *Gen. i. 10* など (1c, d) の場合におけると同様に, “*sehen [voir]+daß-[que-] clause*” が用いられていて, A. V. の英語におけるような構造上の特異性が認められない。

G:(1 c) Gott *sah, daß* es gut war.

(2 c) Gott *sah, daß* das Licht gut war.

F:(1 d) Dieu *vit que* cela était bon.

(2 d) Dieu *vit que* la lumière était bonne;

聖書からのいま 1 例として, 同様な表現上の特徴の見られる *John ix. 8* について, R. V. 訳をラテン語訳, R. S. V. 訳, ドイツ語訳およびフランス語訳と対照的に並記してみよう。<sup>(9)</sup>

(4) R. V.: they which *saw him* aforetime, *that* he was a beggar,

(4 a) L: qui *viderant eum prius, quia* mendicus erat,

- (4 b) R. S. V.: those who *had seen him* before as a beggar,  
 (4 c) G: die *ihn* zuvor *gesehen hatten*, *daß* er ein Bettler war,  
 (4 d) F: ceux qui auparavant *l'avaient connu comme* un mendiant

ラテン語訳における接続詞 *quia* は付加的な理由を示す副詞節を導く語であり、それが R. V. とドイツ語訳の *that, daß* に引き継がれており、その間に意味機能上に多少のずれも見受けられるが、*see* [vidère, sehen] の目的語としてまず具体的な人をさす代名詞を立て、ついでそのあとに、その同じ人をさす代名詞を主語とする陳述内容の従属節を敷衍的に追加している点では、*Gen. i. 4* の場合と軌を同じくしている。そして、この冗語的構造が現代の R. S. V. では *as* によって、またフランス語訳では——主要動詞に *voir* よりも知覚作用の意味をより明瞭に表わす *connaître* が用いられているが——*comme* によって、それぞれ導かれる目的叙述語を従える簡潔で明晰な構造に代えられている。<sup>(10)</sup>

上にあげた現象は、感覚動詞と知覚動詞とにわたる *see* の意味上および構造上の浮動を反映し、それが心理的で素朴な言語表現を特徴とする古い時代の英語統語法のひとつの傾向をなしているものであるが、以下、観察の焦点を不定詞付き対格のかかわる表現法に絞って、感覚動詞・使役動詞・意欲動詞の順に、それぞれの動詞が古い時期にしばしば、簡潔な不定詞句構造に代わって冗長な節構造を従えて用いられた現象に注目しようと思う。この際関係する種類の動詞として、ほかに概念動詞があり、しかも *see* のように感覚動詞と概念動詞との微妙な関連を象徴している動詞があることには注意すべきではあるが、概念動詞そのものはもともと *that*-clause を目的語として従える特性を備えており、通時的にも共時的にも、不定詞付き対格構造に対してよりも、対応する目的語節構造に対して、いっそう適応しているとみなされうるものである。一応以下の考察の対象から概念動詞を除くこととする。

## II

I でも触れたように、感覚動詞は古期英語以来不定詞付き対格を従えることが本来的構造として確立していた。その場合、感覚作用の対象の動作が持続的なものとして記述されるときには、不定詞に代わって現在分詞 (Present participle) が対格に伴うことは、古くから見られたきわめて自然な表現法である。實際上、感覚動詞を主要動詞とする場合、この両構造は互いに共通して、対応する目的語節構造に対照されるべき性格のものである。したがって、ここでは、統語機能の観点から「現在分詞付き対

格」を「不定詞付き対格」と対等に扱うことにする。

10 世紀末の Anglo-Saxon Gospels や 11 世紀の Old English Heptateuch において、ラテン語訳聖書における *videre* や *audire* のあとに不定詞または現在分詞付き対格を伴う構造が、そのまま古期英語の (ge)sēon または (ge)hieran の不定詞または現在分詞付き対格を従える構造に写されていることが普通である。しかしその中において、時に、ラテン語訳における不定詞または現在分詞付き対格が古期英語訳で目的語節に代えられており、それが後代の訳で再び不定詞または現在分詞付き対格に還元されている、つぎのような例の見られることは注目に価する。

(1) *John* xxi. 20:

L: Petrus *vidit* illum discipulum...*sequentem*,  
 A.-S. G.: Ða *geseah* he *ðæt* se leorning-cniht him fyligde,  
 Wycl.<sup>2</sup>: Petre...*syȝ* thilke disciple,  
 Tyn.: Peter...*sawe* that disciple...*folowynge*,  
 A. V.: Peter...*seeth* the Disciple...*following*,  
 R. S. V.: Peter...*saw following* them the disciple...

(2) *John* xi. 33:

L: ut *vidit* eam *plorantem* et Judæos...*plorantes*,  
 A.-S. G.: Ða se Hælend *geseah* *ðæt* heo weop, and *ðæt* ða Iudeas weopon...  
 Wycl.<sup>2</sup>: as Jhesu *siȝ* hir *wepynge*, and the Jewis...*wepinge*,  
 Tyn.: When Jesus *sawe* her *wepe*, and the Jewes also *wepe*...  
 A. V.: When Iesus *sawe*...her *weeping*, and the Iewes also *weeping*...  
 R. S. V.: When Jesus *saw* her *weeping*, and the Jews...also *weeping*,

(3) *Gen.* xxvii. 6:

L: *Audivi* patrem tuum *loquentem* cum Esau fratre tuo,  
 Ælf.: Ic *gehyrde* *pæt* ðin fæder cwæð to Esauwe pinum bræðer:  
 Wycl.<sup>1</sup>: I *herde* pi fader *spekyng* with Esau pi broþer:  
 A. V.: I *heard* thy father *speake* vnto Esau thy brother,  
 R. S. V.: I *heard* your father *speak* to your brother Esau,

(4) *Gen.* xxxvii. 17:

L: *audivi*...*eos dicentes*: Eamus in Dothain.  
 Ælf.: ic *gehyrde* *ðæt* hi cwædon *pæt* hig woldon to Dothaim.  
 Wycl.<sup>1</sup>: I *herde* hem *seying*: go we in to Dothaim  
 A. V.: I *heard* them *say*, Let vs goe to Dothan.  
 R. S. V.: I *heard* them *say*, 'Let us go to Dothan.'

(5) *Num.* xi. 10:

L: *Audivit*...Moyses *flentem* populum per familias,  
 Ælf.: Moyses *gehyrde* *ðæt* ðæt folc weop,

Wycl.<sup>1</sup>: Moises *herde* þe *peple wepynge* by meynes  
 A. V.: Moses *heard* the people *weepe* throughout their families,  
 R. S. V.: Moses *heard* the people *weeping* throughout their families,

以上のうち *John* xxi. 20 で Wyclif 訳が *sy3* の単独な目的語の名詞語群を従える構造になっているほかは、すべて古期英語訳だけで *gesēon* や *gehieran* が目的語に *þæt*-clause を従える構造となっていて、他の訳ではみな不定詞または現在分詞付き対格構造が用いられている。<sup>(11)</sup> つぎの例では、ラテン語訳で *audire* が目的語に単独な名詞語群を伴っており、その構造が Wyclif 訳に受け継がれているが、古期英語訳と、さらに A. V. と R. S. V. とでは、目的語節構造になっている。なお、ここでは N. E. B. で不定詞付き対格が用いられているので、特に N. E. B. 訳もあげることにする。

(6) *Gen.* xxxix. 15:  
 L: *audisset* vocem meam,  
 Ælf.: he *gehyrde þæt* ic hrymde,  
 Wycl.<sup>1</sup>: he *herde* my voyce:  
 A. V.: he *heard that* I lifted vp my voice, and cried,  
 R. S. V.: he *heard that* I lifted up my voice and cried,  
 N. E. B.: he *heard* me *scream* and *call* out,

つぎの引用箇所では、ラテン語訳で *videre* が従位接続詞 *quia* の導く節を従えており、その構造が Wyclif 訳に引き継がれているが、古期英語では *þæt* に導かれる節を従え、それが R. S. V. に踏襲されている。しかし、Tyndale 訳と A. V. では不定詞付き対格が、また N. E. B. では現在分詞付き対格が用いられている。<sup>(12)</sup>

(7) *John* vi. 5:  
 L: *vidisset quia* multitudo maxima venit ad sum,  
 A.-S. G.: *geseah, ðæt* micel folc com to him,  
 Wycl.<sup>2</sup>: *hadde seyn, for* a greet multitude cam to him,  
 Tyn.: *sawe* a greate company *come* vnto hym,  
 A. V.: *saw* a great company *come* vnto him,  
 R. S. V.: *seeing that* a multitude was coming to him,  
 N. E. B.: *seeing* a large crowd *coming* towards him,

つぎの例では、ラテン語訳に “*videre*+対格名詞+*quia*-clause” が用いられており、それが Wyclif 訳に “*see*+対格名詞+*for*-clause” の形で、<sup>(13)</sup> また Tyndale 訳と A. V. に “*see*+対格名詞+*that*-clause” の形で踏襲されているが、古期英語訳ではやはり

“*gesēon+þæt-clause*”が見られ、R. S. V. では、それが “*see+acc. w. inf.*” に代えられている。

(8) *John xi. 31:*

L: cum *vidissent Mariam quia cito surrexit, et exiit,*  
 A.-S. G.: ða hig *gesawon, ðæt Maria aras, and mid ofeste ut-eode*  
 Wycl.<sup>2</sup>: whanne thei *sizen Marie, for soone she roos, and wente out*  
 Tyn.: when they *sawe Mary, that she rose vppe hastily, and went out,*  
 A. V.: when they *saw Mary that she rose vp hastily, and went out,*  
 R. S. V.: When the Jews...*saw Mary rise quickly and go out,*

つぎの(9)では、ラテン語訳で *videre* の目的語として関係詞の導く名詞節が用いられており、その構造が古期英語訳を除くすべての訳に “名詞+連体的関係詞節” の形式で踏襲されているが、ただ古期英語訳でだけ “*gesēon+þæt-clause*” の構造に代えられている<sup>(14)</sup>。

(9) *John vi. 14:*

L: cum *vidissent quod Jesus fecerat signum,*<sup>(16)</sup>  
 A.-S. G.: ða hig *gesawon ðæt he ðæt tacen worhte,*  
 Wycl.<sup>2</sup>: whanne thei *hadden seyn the tokene that he hadde don,*  
 Tyn.: when they *had sene the myracle that Jesus did,*  
 A. V.: when they *had seene the miracle that Jesus did,*  
 R. S. V.: When the people *saw the sign which he had done,*

この A.-S. G. における *ðæt* の用法は、インド・ヨーロッパ語の関係詞と従位接続詞との間に見られる形態上ならびに機能上の緊密な関連性を示唆している。

以上にあげた例は、特に古期英語で “感覚動詞+*that-clause*” が好まれる特徴と、このような抽象的把握の表現法が具象的把握の表現法に代えられる一般的な趨勢を実証するものであるが、一方またこれとは部分的に逆行して、古く現在分詞付き対格構造が用いられたのに、それが後にかえって目的語節構造に移行している、つぎのような例も見受けられる。

(10) *John vii. 32:*

L: *Audierunt Pharisei turbam murmurantem de illo hæc:*  
 A.-S. G.: Ða Pharisei *gehyrdon ða menigco ðus murcniende be him;*  
 Wycl.<sup>2</sup>: Pharisees *herden the cumpeneye of peple grucchinge of him thes thingis;*  
 Tyn.: The Pharises *herde that the people murmured suche thynges about*



hym;

A. V.: The Pharisees *heard that* the people murmured such things concerning him:

R. V.: The Pharisees *heard* the multitude *murmuring* these things concerning him;

R. S. V.: The Pharisees *heard* the crowd thus *muttering* about him,

ここでは、Tyndale 訳と A. V. で用いられた“<sup>(17)</sup> 感覚動詞+目的語節”が R. V. と R. S. V. とでは廃棄され、再びもとの“感覚動詞+現在分詞付き対格”に還元されている。ただこの例で注意されるのは、hear という動詞のもつ具体的な人を直接的な対象とする感覚作用の意味と一つの陳述内容としての事実を対象とする知覚ないし概念作用の意味との間の微妙な浮動であり、英語の慣用的実情に照らしても、このような場合には、あながち Tyndale 訳や A. V. 訳の表現を不適当なものとは断定しがたいということである。<sup>(18)</sup>

最後に、see (L. *videre*) の目的語として、古期英語訳では連体用法の現在分詞に先立たれた対格の名詞が用いられ、ラテン語訳と Wyclif 訳では現在分詞付き対格が用いられ、それが後の Tyndale 訳、A. V.、および R. S. V. では *that*-clause の構造<sup>(19)</sup> になっている例をあげる。

(11) *Mark ix. 25:*

L: cum *videret* Jesus *concurrentem* turbam,

A.-S. G.: ða se Hælend *geseah* ða to-yrnendan manegu,

Wycl.<sup>2</sup>: whanne Jhesus *hadde seyn* the company of peple *rennyng*e to gidere,

Tyn.: When Jesus *sawe that* the people cam runnyng together vnto hym,

A. V.: When Iesus *saw that* the people came running together,

R. S. V.: when Jesus *saw that* a crowd came running together,

この場合も、「群衆の走り集まる」のを直接に視覚印象に把えるという本来の意味を表わすものとして表現するか、あるいは、そういう事態を心に認知したものとして表現するかは、文脈上の語調やリズムにも左右され、微妙な要因によって決定されるものである。英語の統語法として前者がより慣用的な表現法であることは歴史的にも認められる事実であるが、他方また、後者に傾こうとする傾向が潜在している<sup>(20)</sup> ということも、一つの歴史的現象として無視することができない。

## III

使役動詞の場合は、感覚動詞の場合と異なり、英語統語史上注目すべき変遷の様相を顕在化している。古期英語における代表的な使役動詞は *dōn* (*or gedōn*) (>ModE *do*)<sup>(21)</sup> であるが、それが「人に…させる」という使役の観念を示す構造として当然期待される不定詞付き対格を従えることは、むしろラテン語の影響によって散発的に見られるに留まり、一般的には目的語として *þæt*-clause を従えて用いられた。<sup>(22)</sup> たとえば、9世紀末の West Saxon 方言による King Alfred の *Cura Pastoralis* (E. E. T. S., Nos. 45, 50) では、使役的 *dōn* の不定詞付き対格を従える例は、

- (1) *do hit mon us to witanne*, —357.5.(=Let it be known to us.)

という慣用法 *dōn*…*tō witanne* を含む1例だけで、他の13例はすべて *þæt*-clause<sup>(23)</sup> を従えるものである。つぎに、その中から数例を摘記しよう。

- (2) *he gedēð ðæt he bið suiðe hvæðe ymbe hine sprecende*. —93. 2-3.  
(=He very readily causes him to speak about him.)

- (3) *Ðære scame and ðære scande ðe ðu on iugaðe worhtes ic gedoo ðæt ðu forgietsð*…—207.10-11. (=I will make you forget the shame and disgrace of your youth.)

- (4) *gedoo ðæt ic mæge gehiran ðine stemne*. —381.14-15.(=Let me hear your voice.)

- (5) *hwilum he gedēð ðæt him ðyncð ðæt hit nan scyld ne sie ðæt ðæt he deð*; —415.31-32. (=Sometimes he makes it think that what it does is no sin.)

10世紀末から11世紀初めにかけての作とされる Ælfric の *Homilies: Sup. Col.* (E. E. T. S., Nos. 259, 260) でも、不定詞付き対格を伴うのは、聖句 *faciet illos discumbere* (*Luke ix. 14, xii. 37*)<sup>(24)</sup> の英訳として記している

- (6) *deþ hi sittan*—xxv. (a). 13

の1例だけであり、それに対し *þæt*-clause を伴う構造の例は、先行の指示詞 *þæt* を表わしているもの1例(下の例(10))を含めて、12例に及ぶ。下にそのうち若干をあげる。

(7) La hu ne mihte se *don*, se ðe pone blindan gehælde, *þæt* pes eac ne swulte?—vi. 83–84. (=Behold, how could not the man who healed the blind man also save him from dying?)<sup>(25)</sup>

(8) he *gedyde þæt* pa deafan mihton wel gehyran, and he *gedyde þam dumban þæt* hi mihton spreca. —xvii. 44–45.<sup>(26)</sup>

(9) *Do þæt* ic cunne ðæt lif, —xxiii. 66. (=Let me know that life.) (Cf. *Acta Alexandri Papæ* I.3: *Fac et me probare, ut...*)

(10) heo ne mæg *þæt don*, *þæt* se deada arise parh hyre drycraeft. —xxix. 122–3. (=She cannot cause the dead man to arise by her sorcery.)

このうち、(8)の後半の文で *gedyde* の目的語として一旦与格の *þam dumban* を置き、改めてその *þam dumban* のさす同一人を示す代名詞 *hi* を主語とする *þæt*-clause をあとに置いた重複的構造になっている。ここで、与格の *þam dumban* には対照的な強勢が置かれ、この重文の均衡的リズムの構成に資している点に注意される。

一方、古期英語では *macian* (*or gemacian*) (>ModE *make*) が使役動詞として用いられることが確立していなかった。つぎのような用例は、後代の用法に対する端緒をなすものと見てよい。<sup>(27)</sup>

(11) *gemacað ðæt* his ege and his onwald wierð to gewunan and to landside on his scire.—*Cura Pastoralis* 121. 25–123. 1. (=He causes the reverence of himself and his power to become the regular habit of the country he rules.)

(12) *macedon hit* pa pet ær wæs ful rice, pa hit wearð to nanþing. —*A.-S. Chron.*, Laud MS., an. 870. (=They reduced to nothing what had once been very rich.)

いずれも *(ge)macian* が目的語節を従えている例であるが、(12)では従位接続詞の *þæt* が表現されておらず、代わりに先行的代名詞 *hit* (>ModE *it*) が *macedon* の直後に介在する形式目的語として用いられている。

中期英語では、次第に *dōn* が不定詞付き対格を従える用法を確立するようになる。それはラテン語の *facere* (またはそれに由来するフランス語の *faire*) の構造の影響を受けてのこととは推定されうるが、また使役構造として簡潔で合理的な統語法への方向を辿ったものでもあった。しかし、その *dōn* もやがて使役動詞としての表現性に明確を欠くものと感ぜられるようになる。古期英語において“*dōn*+ (対格+) 不定詞”がきびきびした口語調の表現としてかなり好んで用いられたのは事実であったが、一方においては、*dōn* のそれ自体の意味を稀薄にした迂言的表現法との識別が不明と

なり、使役構造の意味とも、また迂言構造の意味とも、どちらとも解されうる曖昧性をはらんだ表現も見られるようになった。たとえば、13世紀の西部方言で書かれた *South English Legendary* (E. E. T. S., No. 87) の、

(13) *pat folk he dude wel lere.* —LI. 102.

は、*dude* を ‘caused’ の意味にとって、‘He caused the people to be well taught.’ と、また *dude* を迂言的機能をもつものと見て、‘He taught the people well.’ と解することができる。そこで、このような曖昧性を伴う *dōn* よりも、より明確な使役動詞が望ましいと思われるようになり、特に西部方言では12世紀ごろから *mākien* が *dōn* に代わって用いられ始めた。東部および北部方言では、*dōn* はなお使役動詞としてその地歩を維持していたが、16世紀以後では一般に *make* や古くからの *let* にとって代えられ、*do* は英語特有の迂言的または強調的助動詞として活路を見出すに至った。<sup>(28)</sup> また14世紀末からは、フランス語から借入された *causen* (>ModE *cause*) が、*to* 不定詞付き対格を従えて、明晰ではあるがそれだけ形式ばった語調の使役構造を確立させるようになった。

いま、*dōn* の使役用法を十分に発達させている14世紀後半の東中部方言の詩人 Chaucer の全作品について、*dōn* と *mākien* の用法を調べてみると、当然のこととして、両語とも一般的に不定詞付き対格を伴って用いられているが、その中であって、まれではあるが、“*dōn* [*mākien*]+*that*-clause” の例も見受けられる。まず、“*dōn*+*that*-clause” の例はつぎの2例である。

(14) *And do that I tomorwe have victorie.* —C. T., A, *Kn. T.*, 2405.<sup>(29)</sup> (=And let me have victory tomorrow.)

(15) *And do that my ship to haven wynne.*—*Anel.* 20. (=And let my ship get safely to the harbour.)

2例とも命令法の *dō* が目的語としての *that*-clause を従えている点に注意される。つぎに、*mākien* が *that*-clause を目的語としているものは19例見られるが、そのうち若干を摘記しておく。

(16) *The clenness and the fastynge of us freres*  
*Maketh that Crist acceptethoure preyers.*  
—C. T., D, *Sum. T.*, 1883-4.  
(=The cleanness and fasting of us friars causes Christ to accept our prayers.)

(17) *He made that the ryver was so smal*  
*That wommen myghte wade it over al.*

—C. T., D., *Sum. T.*, 2083–4.

(18) Thanne mai nat riches *maken that* a man nys nedy, ne *that* he be suffisaunt to hymself; —*Boece* III. pr. iii. 52–3. (=Then wealth cannot cause a man to be needy, nor him to be self-sufficient.)

(19) That *made me that* evere I wolde hem chide. —C. T., D, *W. B. T.*, 419. (=That made me chide them at any time.)

(20) the sclandre of his diffame  
*Made hem that* they hym hatede therefore.  
 —C. T., E, *Cl. T.*, 730–1.

(=The slander of his defame made them hate him for that.)

(21) The drede of lesyng *maketh hym that* he  
 May in no perfit selynesse be;  
 —*Tr. & Cr.* III. 830–1.

(=The dread of losing joy never allows him to be in perfect happiness.)

以上のうち前の3例(16)(17)(18)は *mākien* のあとに直接 *that*-clause を従えたものであり、あとの3例(19)(20)(21)は対格の代名詞を *that*-clause の前に介在させた重複的構造である。

つぎの例は、一つの脈絡の中途に構造がとぎれ統語上の混同をもたらしている現象として注意したい。

(22) Allas! the shorte throte, the tender mouth,  
*Maketh that* est and west and north and south  
 In earthe, in eir, in water, *men to swynke*  
 To gete a glotoun deyntee mete and drynke!  
 —C. T., C, *Pard. T.*, 517–20.

(=Alas! the short throat and tender mouth makes men try and seek everywhere in all directions, to get choice food and drink for a glutton.)

ここでは、語り手が雄弁に *māketh* の目的語として *that* で始まる節内で修飾的語句を連ねていくうちに、論理的思考が中絶して、不定詞付き対格の構造に転向している。いわゆる破格構文 (*Anacholuthon*) の例であるが、いわば、無限な自由をはらむ *that*-clause と形式的制約をもつ不定詞句とが合流し、中途から前者が後者に収斂されている現象である。

以上、使役動詞構造が古期英語から中期英語末にかけて辿った変遷の跡をおおまかに追ってみたのであるが、それは古期英語における “*dōn+þæt*-clause” に始まり、中期英語 (特に西部方言) における “*mākien+acc. w. inf.*” に至る道程ということが

できる。つぎに、これがさらに近代英語の “make+acc. w. inf.” に定着していく過程を、各時期を代表する聖書訳を比較対照することによって確認してみようと思う。

聖書の古期英語訳でも、9世紀前半という早い時期にラテン語訳を忠実に英語に写している *Vespasian Psalter* では、つぎの5節において、ラテン語訳の “*facere+acc. w. inf.*” がそのまま “*dōn+acc. w. inf.*” に写し出されている。下には、それぞれに対応する14世紀の *Wyclif* 訳 (Earlier Version) を並記するが、この中期英語では主要動詞が *mākien* に代えられており、それに従う不定詞付き対格構造の不定詞が *to* 不定詞の形態で表わされ、*mākien* の構造の占める歴史的段階を示唆している。

(23) *Ps. xxxviii. 12:*

L: *tabescere fecisti...animam ejus:*

Vesp.: *aswindan ðu des...sawle his*

Wycl.<sup>1</sup>: *Þou madest to floowen awei...his soule:*

(24) *Ps. 1xvii. 7:*

L: *Deus cum inhabitare facit unanimes\* [unius moris] in domo:*

Vesp.: *god se eardian doeð anmodde in huse*

Wycl.<sup>1</sup>: *god þat makeþ to indwellen of oon maner in an hous*

(25) *Ps. ciii. 32:*

L: *Qui respicit terram, et facit eam tremere:*

Vesp.: *se gelocað in eorðan and doeð hie cwaecian*

Wycl.<sup>1</sup>: *Þat beholdep þe erpe and makeþ it to tremblen:*

(26) *Ps. cxii. 9:*

L: *Qui habitare facit sterilem in domo.*

Vesp.: *se eardian doeð unbeorende in huse*

Wycl.<sup>1</sup>: *Þat makeþ to wonen þe bareyn in þe hous:*

(27) *Ps. cxviii. 139:*

L: *Tabescere me fecit zelus domus\* tuae\* [meus]:*

Vesp.: *aswindan mec dyde ellen huses ðines*

Wycl.<sup>1</sup>: *My looue made me to dwyynen:*

しかし、古期英語の慣用法をかなりの程度に駆使している *Anglo-Saxon Gospels* では、ラテン語訳における “*facere+acc. w. inf.*” が常に “*dōn+þæt-clause*” となっている。そういう対応の見られるのが、つぎの8箇所に及んでいるが、それが後の中期英語訳と近代英語訳とで “*make+acc. w. inf.*” によって代えられてゆく過程を眺めてみよう。ここでは、特に、ラテン語訳から A.-S. G. に移る中間の段階を物語るものとして、*Lindisfarne Gospels* と *Rushworth Gospels* の表現も参考までにあげる

こととする。なお, *Matt.* iv. 19 (28) と *Mark* i. 17 とが内容が重複しているので, 後者を別に記すことを避け, 前者と表現の相違が見られる場合, それを ( ) 内に付記する。

(28) *Matt.* iv. 19 (*Mark* i. 17):

L: *faciam* vos *feri* piscatores hominum.

Lind.: ic *gedo* Iuih *sie* [*wosa*] *fisceras* monna

(ic *ge-do* iuih [*ðæt* *ge*] *sie* *fisceras* monna)

Rush.: ic *gedom* *ðæt* git beoþan monna *fisceres*

(*gedoa* *eowic* *ðæt* *ge* beoþan [*seon*] *fisceres* monnum)

A.-S. G.: ic *do* *ðæt* gyt beoð manna *fisceras*.

(ic *do inc* *ðæt* gyt beoð sawla onfonde.)

Wycl.<sup>2</sup>: I shal *make* *zou* to be *maad* *fisheris* (fishers) of men.

Tyn.: I will *make* you *fishers* of men.

(I wyll *make* you to be *fysshers* of men.)

A. V.: I will *make* you *fishers* of men.

(I will *make* you to become *fishers* of men.)

(29) *Matt.* v. 32:

L: *facit* eam *moechari*:

Lind.: *gedoed* [*wircas*] ða ilca *gesyngege*

Rush.: he *doep* *ðæt* hiu dernunge licgæ

A.-S. G.: he *dep* *ðæt* heo unricht-hæmp,

Wycl.<sup>2</sup>: he *makith* hire *do* lecherie,

Tyn.: *causeth* her to *breake* matrimony,

A. V.: *causeth* her to *commit* adultery:

(30) *Matt.* v. 45:

L: *quia*\* [*qui*] *solem* suum *oriri* *facit* super bonos et malos:

Lind.: forðon sunna his *arise* *doeð* ofer godo and yfle

Rush.: *sepe* his sunne *doep* *uppgangan* ofer gode and yfle

A.-S. G.: se þe *dep* *ðæt* his sunne up-aspingþ ofer ða godan and ofer ða yfelan

Wycl.<sup>2</sup>: that *makith* his sunne to *springe* vp vpon good and yuel men,

Tyn.: he *maketh* his sunne to *aryse* on the yvell and on the good,

A. V.: he *maketh* his sunne to *rise* on the euill and on the good,

(31) *Mark* vii. 37:

L: *surdos* *fecit* *audire*, et *mutos* *loqui*.

Lind.: *deof* *dyde* *ðætte* hia *geheras* and *dumbo* *ðætte* hia *gesprecas*

Rush.: *deafe* *dyde* *ðætte* hia *giheras* and *dumbæ* *sprecon*.

A.-S. G.: he *dyde* *ðæt* *deafe* *gehyrdon*, and *dumbe* *spræcon*.<sup>(31)</sup>

Wycl.<sup>2</sup>: *deef* men he *made* to *heere*, and *doumbe* for to *speke*.

Tyn.: *hath made* booth the deffe *to heare*, and the dom *to speake*.

A. V.: hee *maketh* both the deafe *to heare*, and the dumbe *to speake*.<sup>(32)</sup>

(32) *Luke ix. 14:*

L: *Facite illos discumbere per convivia*

Lind.: *doæð ðæm to dælum* [ðerh gebearscipo]

Rush.: —

A. -S. G.: *Dop ðæt* hig sitton purh gebeorscypas,<sup>(33)</sup>

Wycl.<sup>2</sup>: *Make hem to sitte* to mete by feestis

Tyn.: *Cause them to sit* doune...in a company.

A. V.: *Make them sit* doune...in a company.

(33) *Luke xii. 37:*

L: *faciet illos discumbere,*

Lind.: *doæð hia gehriordagæ*

Rush.: *doæð hiaæ giriordinge*

A. -S. G.: he...*deþ ðæt* hig sittap,<sup>(34)</sup>

Wycl.<sup>2</sup>: he schal *make hem to sitte* at the mete,

Tyn.: he will...*make them sitt* doune to meate,

A. V.: he shall... *make them to sit* doune to meate,

(34) *John vi. 10:*

L: *Facite homines discumbere.*

Lind.: *wyrcaas* [*does*] *ðætte* ða menn gesitta

Rush.: *wyrcaas* *ðætte* ða menn gisitte

A. -S. G.: *Dop ðæt* ðas men sitton.

Wycl.<sup>2</sup>: *Make 3e men for to sitte* at the mete.

Tyn.: *Make the people to sit* doune.

A. V.: *Make the men sit* doune.

ここで、Lind. と Rush. とでは、ラテン語訳の “*facere*+acc. w. inf.” をそのまま英語の “*dōn* (*gedōn*, or *wyrcaan*)<sup>(35)</sup>+acc. w. inf.” に移されている場合——Lind. (28) (29) (30) (33), Rush. (30)——と、A.-S. G. 式に “*dōn*(*gedōn*, or *wyrcaan*)+*þæt*-clause” が用いられている場合——Lind. (28) (31) (34), Rush. (28) (29) (31) (34)——とがあるほか、(32) Lind. に “*dōn*+与格+前置詞付きの句”<sup>(36)</sup>, (33) Rush. に “*dōn*+対格+副詞的与格”<sup>(37)</sup> という *dōn* の ‘to put, place’ の意味を思わせる構造が見られて、構造表現上かなりの不安定さを暴露している。それに対し、A.-S. G. では、上にあげた8節の全部にわたって “*dōn*+*þæt*-clause” が用いられ、ラテン語訳に把らわれない古期英語の定着した慣用法を示している。そのうち、これは (28) Rush. と (31) Lind. および Rush. とにも見られるものであるが、(28) (*Mark i.*



17) には, “*dōn+acc.+þæt-clause*” という重複的表現法が見られ, この種の構造を特徴づける端的直截性を具現している。

この古期英語における “*dōn+þæt-clause*” が中期および近代英語の “*make (or cause)+acc. w. inf.*” に代えられていく過程も, 上に並記した引用から明らかである。“*make+acc. w. inf.*” の場合, その不定詞は Wycl., Tyn. および A. V. では, しばしば *to*-infinitive で表わされ, さらに Wycl. では *for to*-infinitive で表わされることもあって, この統語法の過渡的様相を示唆しているが, これは使役動詞構造の変遷<sup>(38)</sup>の大筋から見れば局部的現象にすぎない。

つぎに Heptateuch では, ラテン語訳の “*facere+acc. w. inf.*” が Ælfric 訳で “*dōn (or gedōn)+þæt-clause*” となっているものに, つぎの7箇所があり, やはり “*dōn+acc. w. inf.*” で訳されているものは見当たらない。下に, それぞれに対応する Wyclif 訳 (Earlier Version) と A. V. 訳を並記する。

(35) *Gen. xvii. 6:*

L: *Faciam te crescere vehementissime,*

Ælf.: ic *gedo þæt ðu wyxt,*

Wycl.<sup>1</sup>: I schall *make þe growe most hugely*

A. V.: I will *make thee exceeding fruitfull,*

(36) *Gen. 1. 23:*

L: *Deus...ascendere vos faciet de terra ista*

Ælf.: God...*deþ ðæt ge farap of pison lande*

Wycl.<sup>1</sup>: god schall...*make 3ou styen vp fro pis lond*

A. V.: God will...*bring you out of this land,*

(37) *Exod. xxxiv. 16:*

L: *ne...fornicari faciant et filios tuos in deos suos.*

Ælf.: *þe læs þe hi gedon þæt pine bearn singian on heora godas*

Wycl.<sup>1</sup>: *lest...pay make to do fornycaciouns and þi sonnes in to here goddis*

A. V.: *lest...their daughters...make thy sonnes goe a whoring after their gods.*

(38) *Lev. iv. 3:*

L: *Si sacerdos...peccaverit, delinquere faciens populum,*

Ælf.: *Gyf se...sacerd syngað and deþ ðæt ðæt folc syngie,*

Wycl.<sup>1</sup>: *gif þe prest...sinne, makynge þe peple to trespace,*

R. V.: *if the...priest shall sin so as to bring guilt on the people;*

(39) *Lev. xix. 19:*

L: *Jumentum tuum non facies corre cum alterius generis animantibus.*

Ælf.: ne *do* ðu þæt nytenu hæmon mid opres cynnes nytenum:

Wycl.<sup>1</sup>: þy beestes þou shalt not *make go* to geders wip beestes of anoper kynde

A. V.: Thou shalt not *let* thy cattell *gender* with a diuerse kinde:

(40) *Deut.* xiii. 5:

L: ut *errare* te *faceret* de via,

Ælf.: for ðam ðe he *dyde* ðæt ge dweledon of dam wege

Wycl.<sup>1</sup>: þat he *make* þee to *err* fro þe way

A. V.: to thrust thee out of the way

(41) *Deut.* xxxii. 26:

L: *cessare* *faciam* ex hominibus memoriam eorum.

Ælf.: ic *gedo* ðæt hyra gemynd geswiedð of eallum mannum.

Wycl.<sup>1</sup>: to *ceese* y shal *make* fro men þe mynde of hem

A. V.: I would *make* the remembrance of them to *cease* fro among men:

ここでも、Ælf. における“(ge)dōn+þæt-clause”が Wycl. ではすべて“mākien+acc. w. inf.”となっている。A. V. では、それがまた“let+acc. w. inf.”であったり、使役動詞構造以外の表現で訳されていたりしているのは、A. V. が Wycl. よりも意識的要素が強化され、いっそう英語としての表現の自然さを目指していることによるといえよう。

聖書からの引用に関連して、ラテン語聖書で“facere+ut-clause”が用いられており、その構造が A.-S. G. にも Wycl. にも、Tyn. にも、また A. V. にも引き継がれて、聖書の英語特有の古雅な文体に対し一つの構成素をなしている例を付け加えよう。

(42) *John* xi. 37:

L: Non porerat hic...*facere ut* hic non moreretur?

A.-S. G.: Ne mihte...*don* eac ðæt ðes nære dead?<sup>(40)</sup>

Wycl.<sup>2</sup>: Wher this man...*mizte* not *make that* and this deiede not?

Tyn.: Coude not he...*have made* also *that* this man shulde not have deyed?

A. V.: Could not this man...*haue caused that* euen this man should not haue died?

Cf. R. S. V.: Could not he...*have kept* this man from dying?

この Tyndale 訳や A. V. に見られる *make that...* や *cause that...* は明らかに近代英語では古風な語法とみなされるものである。*make* や *cause* に従う不定詞付き

対格は意味上にも特に合理的な構造と考えられるものだけに、なお近代英語に散見される “*make [cause]+that-clause*” の例は、いっそうわれわれの注意を引く。下に、そのような例を二三記しておく。

(43) *cause that* it be read also in the church of the Laodiceans: —A. V., *Col.* iv. 16(cf. L: *facita ut* et in Laodicensium ecclesia legatur: /Wycl.(1380): *do ze that* it be redde in the chirche of laodicensis, /Tyn. (1534): *make that* it be redde in the congregacion of the Loadicians also: /R. S. V.: have it read also in the church of the Laodiceans;)

(44) by his malicious means he *caused that* the king made all the said lords to be taken, and their heads to be stricken off without delay, ... —Lord Berners, *The Chronicles of Froissart* vi (1523–4).

(45) if it (*i. e.* love) check once with business, it...*maketh men that* they can no ways be true to thier own ends.—Bacon, *The Essays* x (1612).

(46) The fear of being swallow'd up alive, *made me that* I never slept in quiet, ... —Defoe, *Robinson Crusoe* (ed. J. D. Crowley, 1972), p. 82 (1719).

#### IV

意欲動詞が直後に人をさす対格または与格の語を介在させ、そのあとに同じ人に関する陳述内容の目的語節を置く重複的構造が、簡潔な不定詞付き対格を従える構造に推移することも、英語統語史上に見られる自然な傾向である。以下、主として各時期の英訳聖書からの引用例を比較対照することによって、この傾向に注目してみたい。

まず、古期英語の *bebēodan* (=‘to command’) がしばしば “与格+*þæt*-clause”<sup>(41)</sup> を従えて用いられたが、その構造が中期英語において *comānden* (<OF *commander*) の “与格句+*that*-clause” を従える構造に代えられ、それがやがて近代英語の “*command*+acc. w. inf.” に代えられていく過程が、つぎの引用に見られる。

(1) *Mark* vi. 39:

L: *præcepit illis ut* accumbere facerent omnes...super viride foemum.

Lind.: <sup>(42)</sup>*heht him ðætte gesniða gedydon alle...ofer groene gers*

Rush.: *bibead him ðæt hiæ gisnide...alle...ofer groenum hegge [grese].*

A.-S. G.: *ða bebead se Hælend, ðæt ðæt folc sæte ofer ðæt grene hig.*

Wycl.<sup>2</sup>: *he comaundide to hem, that* thei schulden make alle men sitte... vpon greene hey.

Tyn.: *he commaunded them, to make* them all sytt doune... apou the grene

grasse.

A. V.: he *commanded* them to *make* all sit downe...vpon the greene grasse. <sup>(43)</sup>

ここでは、A.-S. G. に “*bebēodan*+*þæt*-clause” という比較的簡潔な構造が見られるが、Wycl. では再びラテン語訳や Lind. や Rush. におけると同様な重複的構造が現われている。<sup>(44)</sup> しかし、それも Tyn. や A. V. ではいっそう簡潔で論理的な “*command*+acc. w. inf.” に定着している姿が見受けられる。<sup>(45)</sup>

A.-S. G. に *læran* (=‘to teach’) を用いているつぎの引用例も参考になろう。

(2) *Matt.* xxviii. 20:

L: *Docentes eos servare omnia quæcumque mandavi vobis:*

Lind.: *lærende hia halda alle ða ðe sua huelc ic bebead iuh*

Rush.: *lærende hiæ to healdene eall swa hwæt swa ic bebead eow*

A.-S. G.: And *læraþ ðæt* hig healdon ealle ða ping, ðe ic eow bebead;

Wycl.<sup>2</sup>: *Techinge hem for to kepe* alle thingis, what euere thingis I have comaundid to 3ou;

Tyn.: *Teachinge them to obserue* all thynges, whatsoever I commaunded you;

A. V.: *Teaching them to obserue* all things, whatsoever I haue commanded you:

ラテン語聖書の “*docēre* (=to teach)+acc. w. inf.” が Lind. や Rush. ではそのまま “*læran*+acc. w. inf.” で訳されており、Wycl. 以後において “*teach*+acc. w. inf.” によって再現されているのに対し、A.-S. G. では “*læran*+*þæt*-clause” が用いられている。<sup>(46)</sup>

最後に、A.-S. G. において *wille* (=‘wish’), 過去形 *wolde* (またはその否定形 *nylle*, *noilde*) が, (3) におけるように、不定詞付き対格を従えて用いられ、また一方においては, (4) (5) (6) におけるように、*þæt*-clause を従えて用いられている現象を眺めてみよう。

(3) *Luke* i. 62:

L: quem *vellet vocari* eum.

A.-S. G.: hwæt he *wolde hine genemnedne beon.*

Wycl.<sup>2</sup>: whom he *wolde him for to be clepid.* <sup>(47)</sup>

Tyn.: howe he *wolde have* hym called.

A. V.: how he *would haue* him called.

N. E. B.: what he *would like* him to be called.

(4) *John* xxi. 22: <sup>(48)</sup>

L: Si eum *volo manere* donec veniam,  
 A.-S. G.: Ic *wylle ðæt* he wunige ðus oð ic come,  
 Wycl.<sup>2</sup>: So I *wole* him *dwelle* til I come,  
 Tyn.: Yf I *will have* hym to tary tyll I come,  
 A. V.: If I *will that* he tary till I come,  
 R. S. V.: If it is my will that he remain until I come,

(5) *Luke* xix. 14:

L: *Nolumus hunc regnare* super nos.  
 A.-S. G.: We *nyllap, ðæt* ðes ricie ofer us.  
 Wycl.<sup>2</sup>: We *nyle, that* he regne on vs.  
 Tyn.: We *will not have* this man to *raigne* over vs.  
 A. V.: We *wil not haue* this man to *reigne* ouer vs.  
 R. S. V.: We *do not want* this man to *reign* over us.

(6) *Mark* vii 24:

L: *neminem uoluit scire*,  
 A.-S. G.: he *molde ðæt* hit ænig wiste;  
 Wycl.<sup>2</sup>: *wolde* no man *wile*;  
 Tyn.: *wolde that* no man shulde have knowen off hym;  
 A. V.: *would haue* no man *know* it,  
 R. S. V.: *would not have* any one *know* it;

ラテン語聖書における“*velle*+acc. w. inf.”が A.-S. G. ではむしろ“*willan*+*þæt*-clause”で表わされることが多かったのは、この意欲動詞に接する不定詞付き対格が当時すでに英語に順応しがたい構造と感じられていた事実を物語っている。それが Wycl. ではしばしば“*willen*+acc. w. inf.”で復元され、また Tyn. や A. V. で時に“*will*+*that*-clause”が維持されたが、やがて前者に続いて後者も古風な表現法と意識されるようになった。そして近代英語の大勢は、この *will* を古くからの助動詞としての *will* と合体させ、*have* を添え、それに不定詞付き対格を結合させるか、あるいはいっそう意欲の観念を明示しうる *want* や *like* に不定詞付き対格を従えて用いる表現法に傾いている。ここに端なくも、近代英語の口語体に特異な慣用性を発揮している使役的動詞としての *have* の発達について、真相の一斑が啓示されている。

## V

われわれは特に現代英語に原形不定詞付き対格構造を伝えている感覚動詞や使役動詞について、英語史の伝統に根差した本質的慣用性を認めなければならない。しかし

その使役動詞の中でも、古期英語において語義上で代表的語であったといえる *dōn* が *þæt*-clause を従えることの普通であったことは、一般にラテン語訳聖書の統語法の影響を受けやすいはずの Anglo-Saxon Gospels や O. E. Heptateuch における現象を見ても明らかである。*dōn* 自体使役動詞としては中期英語期末までに廃棄されたが、われわれが素朴な目的語節構造と簡潔な不定詞付き対格構造のそれぞれの歩みを英語統語史上の特徴的な事実として観察するとき、古期英語におけるこの *dōn* の構造は看過しえない価値を呈示している。

意欲動詞や概念動詞については、特に、その不定詞付き対格構造の普及がラテン語の影響によると見られる局面が少なくないのであるが、使役動詞の OE *dōn*——そしてある程度 ME *mākien* や *causen*——の場合ほど明瞭には、歴史的に目的語節構造から不定詞付き対格構造へ推移したという事実を認めることができない。しかし局部的にせよ、意欲動詞や概念動詞について、あるいは感覚動詞についてさえも、不定詞付き対格構造の系列の中に、目的語節構造がいわば本源的な力をもって出現しようとする徴候が見受けられるということは、英語の統語表現法における一つの歴史的な特質を象徴しているように思われる。

## 注

1. F. Th. Visser は *An Historical Syntax of the English Language*, III, 2nd Half(1973), p. 2235 において、特にこの構造における “object/subject” が歴史的に与格 (Dative) であった側面を指摘しているが、やはりその発生情況と統語的特質に鑑み、対格が本来のものであり、主要動詞の性質によりその間接的目的語として与格を従えるものがあつたとしても、特に中期英語以後各形態の融合が生じた段階においては、それはむしろ本来的な対格に同化させて扱われるべきものである (cf. J. Zeitlin, *The Accusative with Infinitive and Some Kindred Constructions in English* (1908))。
2. Cf. Visser, *op. cit.* § 2059.
3. Cf. Zeitlin, *op. cit.* p. 42 f.
4. M. Callaway, *The Infinitive in Anglo-Saxon* (1913) の巻末に付けられた統計表によれば、古期英語の散文・韻文の全作品中に用いられている、助動詞に接するものを除いた Uninflected infinitive(つまり、原形不定詞) の数 6270 のうち、対格付き不定詞構造に用いられているものが 1512 であり、全体の 24% に当たる。
5. ここに、本稿中に引用する英訳聖書のテキストを一括して刊行年代順に記しておく。冒頭の略語は本稿中に用いるもの。それぞれに刊行年代を示すが、古期および中期英語の作には、その前に使用言語の方言区分を付記する。

(1) Vesp.: The Vespasian Psalter Mercian, 8 世紀。H Sweet, *The Oldest English Texts* (E. E. T. S., No. 83, 1885). (2) Lind: The Lindisfarne Gospels Northumbrian, c. 950. W. W. Skeat, *The Gospels according to Saint Matthew, Saint Mark, Saint Luke, and Saint John* (repr. Darmstadt, 1970). (3) Rush: The Rushworth Gospels. Mercian & Northumbrian, 950–1000. Skeat, *op cit.* (4) A-S. G.: The Anglo-Saxon Gospels. West Saxon, 995 J. Bosworth & G Waring, *The Gothic and Anglo-Saxon Gospels as Parallel Columns with the Versions of Wycliffe and Tyndale* (London, 1888). (5) Ælf: Ælfric's Old English Heptateuch West Saxon, 11 世紀。Ed. S. J. Crawford (E. E. T. S., No. 160, 1922). (6) Wycl.<sup>1</sup>: The Earlier Version of the Wycliffite Bible. Central, c. 1385. C. Lindberg, *MS. Bodley 959: Genesis—Baruch* 3. 20, 5 vols (Uppsala, 1961–69). (7) Wycl.<sup>2</sup>: The Wycliffite Bible: The Gospels Central, 1389. Bosworth & Waring, *op cit.* (8) Tyn.: Tyndal's New Testament, 1526. Bosworth & Waring, *op. cit.* (9) A. V.: The Authorized Version. 1611. Ed. W. A. Wright, 5 vols. (Cambridge, 1909). (10) R. V.: The Revised Version. 新約 1881, 旧約 1885. *The Interlinear Bible: A. V. & R. V.* (Cambridge, 1898). (11) R. S. V.: The Revised Standard Version. 新約 1946, 旧約 1952. *The Holy Bible: R. S. V.* (New York, 1959). (12) N. E. B.: The New English Bible. 1970. (Oxford & Cambridge).

なお、以上のほか必要に応じ、*The English Hexapla* (略 *E. Hex.*) (Bagster, London, 1841; repr. AMS, 1975) から Wyclif (1380), Tyndale (1534), Cranmer (1539), Geneva (1557), Rheims (1582) を引用することもある。

6. 本稿でのラテン語訳聖書からの引用は、全般的には *Biblia Sacra Latina: Vulgatæ Editiones Sixti V et Clementis VIII* (Bagster, London) によった。ただし、必要に応じ、Lindisfarne Gospels や Vespasian Psalter が添記されているラテン文をも参照し、それとの相違点を [ ] 内に示した箇所もある。
7. *Die Bibel: nach der Übersetzung Martin Luthers* (Stuttgart, 1972) による。
8. *La Sainte Bible*, par L. Segond (Paris, 1959) による。
9. John ix. 8 は、A. V. では they which before had seene him, that he was blinde となっていて、英訳の精密さに欠ける点が見られ、R. V. ではその点が修正されているので、ここでは比較観察の目的上、A. V. 訳に代えて R. V. 訳をあげることにした。
10. R. S. V. よりもさらに新しい N. E. B. では、この箇所が those who were accustomed to see him begging という、現在分詞付き対格構造で表現されている。
11. もっとも *E. Hex.* 所載 Wyclif (1380) では petir...saie thilke disciple suyng となっていて、やはり現在分詞付き対格が用いられている。
12. ただし、*E. Hex.* 所載 Wyclif (1380) では hadde seen that a greet multitude cam to hym という目的語節構造が見られる。ちなみに、同書所載の (1) Cranmar (1539), (2) Geneva (1557), (3) Rheims (1582) は、それぞれ (1) sawe a great company come vnto hym/(2) saw a great compaignie come vnto him/(3) saw that a very great multitude commeth to him となっている。
13. ただし、*E. Hex.* 所載 Wyclif (1380) では、Tyndale 訳などにおけると同様に、whanne thei saien marie that sche roos swithe and wente out となっている。

14. ただし, 1582 年の Rheims では, when they had seen *what* a signe Iesvs had done のように, ラテン語訳におけると同様の不定関係詞節構造が用いられている。
15. もっとも同じ古期英語訳でも, より古い Lind と Rush. では, それぞれ *miððy gesegon ðæt geworhte becon/miððy gisegun ðæt becon ðætte worhte* と, ラテン語訳の構造が忠実に引き写されている。
16. この構造では, 関係代名詞 *quod* (=what) は中性対格形でそれ自体名詞節を導き, 後置された同じく対格の中性名詞 *signum* (=token, miracle) と同格関係をなしている。ギリシャ語聖書 (*The Interlinear Greek-English New Testament*. Bagster, 1959) の *ἰδόντες ἐεποίησεν σημεῖον* を参照。
17. もっとも, 1582 年の Rheims では, The Pharisees *heard* the multitude *murmuring* these things touching him と “hear+acc. w. pres. p.” が用いられている。
18. ちなみに, この箇所当たるドイツ語訳 (*Die Bibel*, von H. Bruns, Giessen, 1964) では, Als die Pharisäer *das hörten, daß* man so im Volk über ihn redete と目的語節構造が用いられ, フランス語訳 (*op. cit.*) では, Les pharisiens *entendirent* la foule *murmurant* de lui ces choses. と現在分詞付き対格構造が用いられている。
19. ただし, 1582 年の Rheims では, when Iesvs *saw* the people *running* together のように現在分詞付き対格が用いられている。
20. ちなみに, この *Mark ix. 25* は, ドイツ語訳 (Bruns, *Die Bibel*) では Da Jesus *sah, daß* das Volk herzulief と, 目的語節構造が用いられ, フランス語訳 (*op. cit.*) では *voyant* *accourir* la foule と, 不定詞付き対格構造が用いられている。
21. 古期英語の使役動詞としては, ほかに *lætan* (>let), *hātan* (=‘to command’) などがあげられるが, 使役動詞として語義上最も純粋な語は *dōn* である。
22. Cf. A. Ellegård, *The Auxiliary Do: The Establishment and Regulation of its Use in English* (1953), p. 52.
23. Ellegård, *op. cit.* p. 213 を参考とした。
24. 下の例 (32) (33) を参照。
25. 下の例 (42) を参照。
26. 下の例 (31) を参照。
27. つぎのような “*macian*+対格+*tō*+与格” も後代の “*make*+acc. w. inf.” の発達への過渡的段階を象徴している。unfæderlice *macode* heora flæsc him to *mete*.—Ælfric, *Hom.: Sup. Col. xxi* 106-7. (=In an unfatherly manner he made their flesh food for himself.)/Þone *macodan* þa hæpenan him to *mæran gode*, —*ibid.* xxi. 136. (=The heathens made him a greater god for themselves.)
28. Cf. Ellegård, *op. cit.* pp. 47, 55.
29. 以下 Chaucer からの引用は, F. N. Robinson, ed.: *The Works of Geoffrey Chaucer* (Oxford, 1957) による。



30. ただし、これに対応する A. V. (Ps. cxix. 139) では、My zeal hath consumed me となっていて、“make+acc. w. inf.”の構造が見られない。
31. 上の Ælfric からの例 (8) を参照。
32. ただし、1557 年の Geneva では、he *maketh* both *that* the deafe can heare, and the domme speake. のように “make+that-clause” が用いられている。
- 33, 34. 上の Ælfric からの例 (6) を参照。
35. 古期英語の *wyrcan* (>ModE *work*) は、しばしば他動詞として ‘to make, do, cause’ の意味で用いられた。
36. (32) Lind. における to *dælum* における *dælum* は *dæl* (=‘share, portion’) の与格複数形。なお、*gebeorscipo* (=gebeorscipas) は *gebeorscipe* (=‘convivial meeting, feast’) の対格複数形。
37. (33) Rush. における *giriordinge* は *gereordian* (=‘to take food for refreshment, eat’) から派生した名詞 *gereording* (=‘the taking of refreshment, eating’) の与格形。
38. なお、同じ意味内容を重複して表現している (28) の *Matt* iv. 19 と *Mark* i. 17 とで、Tyn. と A. V. が “make+目的語+目的叙述語” と “make+acc. w. inf.” のように異なった表現となっているのは、ギリシャ語聖書の *ποιήσω ὑμᾶς ἀλειεῖς ἀνθρώπων* (*Matt.* iv. 19) と *ποιήσω ὑμᾶς γενέσθαι ἀλειεῖς ἀνθρώπων* (*Mark* i. 17) との相違を写したものである。また、ゴート語聖書 (Bosworth & Waring, *op. cit.*) にも、つぎのように、これと対応した相違が見られる。*gatauya igqis nutans manne* (*Matt.* iv. 19)/*gatauya igqis wairþan nutans manne* (*Mark* i. 17)。
39. この箇所 の A. V. 訳は If the Priest...doe sinne *according to the sinne of the people*, とあって、原典の意味を正しく伝えていない。したがって、この翻訳上の不備を補正していると推定される R. V. 訳を、A. V. 訳に代えてあげることとした。
40. 上の Ælfric からの例 (7) を参照。
41. 古期英語における同類の動詞 *biddan* (=‘to beg, pray’) も、不定詞付き対格構造を従えることの多い動詞であるが、またつぎのように “人をさす対格+þæt-clause” を従えることがあった。
- Her *bæd* Burgred Miercna cyning and his wistan *Æþelwulf* cyning *þæt* he him gefultumade... —A.-S. *Chron.*, Parker MS., an. 853. (=In this year Burgred, King of Mercia, and his councillors begged King Æthelwulf to help them...)/*þa* leode *bæd* georne *þæt* hi him mid fæstan fullic þay dagas, *biddende þone ælmihtigan þæt* he him arian scolde. —Ælfric, *Lives of Saints* xxxii. 228-30. (=He earnestly asked the people to fast with him fully three days, praying the Almighty to have pity on him.)
42. *hēht* (=hēt) は *hātan* (=‘to command’) の過去単数形。*hātan* もしばしば不定詞付き対格を従えて用いられたが、ここでは “与格+þæt-clause” を伴っている。
43. ただし、1582 年の Rheims では、he *commanded* them *that* they should make al sit downe...vpon the greene grasse. と古い重複的構造が用いられている。

44. Wycl. に見られる *comānden to...*にはフランス語の *commander à...* の影響がうかがわれる (cf. Zeitlin, *op. cit.* p. 59)。ちなみに、フランス語聖書では、この箇所が *il leur commanda de les faire tous asseoir...sur l'herbe verte* となっており、やはり “*commander +acc. w. inf.*” が用いられている。
45. もっとも、ギリシヤ語聖書では、つぎのように、*ἐπιτάσσω* (=‘instruct, order’) が不定詞付き与格を従えており、その構造が Tyn. や A. V. に写されているとみることできる。  
*ἐπέταξεν αὐτοῖς ἀνακλιθῆναι πάντας...ἐπὶ τῷ χλωρῷ χόρτῳ.*
46. OE *lāran* はまた、つぎのように “人をさす対格+*þæt*-clause” という重複的構造を従えても用いられたが、その構造はある程度現代英語にまで “*teach*+対格+*that*-clause” によって維持されている。 *þæt syndon þa lareowas þe us lāran sceolon, þæt we gelyfon on God, —Ælfric, Hom.: Sup. Col. xiv. 67-8.* (=These are the teachers who should teach us to believe in God.)
47. ただし、*E. Hex.* 所載の Wycl. (1380) では、*what he wolde that he were clepid* となっていて、“*will+that*-clause” が用いられている。
48. *John xxi. 23* にもこれと共通した表現が見られ、各種の訳も、A.-S. G. が *Dus ic wyll ðæt he wunige oð ic cume* と語順が一部変えられ、Tyn. が *Yff I will that he tary tyll I come* という目的語節構造になっているほかは、*xxi. 22* におけるものと変わりがない。なお、同種の構造は *Mark xv. 9* にも見られるが、ここでは A.-S. G.: *Wylle ge ðæt ic eow forgyfe Iudea cyning?* (cf. R. S. V.: *Do you want me to release for you the King of the Jews?*) に相当するラテン語訳も、*Vultis dimittam vobis regem Judæorum?* となっていて、“*velle*+従位接続詞抜き”の目的語節”の構造が見られる。
49. ただし、*E. Hex.* 所載の Wycl. (1380) では、*John xxi. 22* と *23* とも、*so I wole that he dwelle til I come* のように目的語節構造が用いられている。
50. ちなみに、Cranmer (1539) と Geneva (1557) の *John xxi. 22* と *23* とを記しておく。Cranmer, *22: If I wyll have hym to tary tyll I come/23: yf I wyll that he tary tyll I come//Geneva, 22: If I wolde haue him to tary tyl I come/23: if I wolde that he tary tyl I come*
51. ただし、*E. Hex.* 所載の Wycl. (1380) では、*wolde that no man wiste* と目的語節構造が用いられている。